

エッセイ「印象に残った手術看護」（看護師の部）

最優秀賞受賞作

揺れる涙、揺るがぬ灯火

北向 孝弘

交通外傷による腸管穿孔が疑われる患児の緊急手術。私はその入室を手伝い、役目を終えて肩の力を抜いた。時計の針は22時を過ぎ、手術室には一時の静けさが訪れているが、依然として緊張が漂っていた。ふとホールに目を向けると、一人の女性の姿が目にとまった。肩を落とし、疲れ果てた様子から、先ほどの患児の母親だとすぐに分かった。今にも糸が切れて崩れ落ちそうな姿。それでも必死に気を保とうとする姿に胸を打たれ、自然と足が彼女のもとへ向かっていた。「突然のことで、混乱されていますよね。大丈夫ですか？」声をかけずにはいられなかった。母親は小さくうなずきながら、かすれる声で語り始めた。「祖母と娘と一緒にいて…祖母は亡くなりました。娘は別の病院で、下半身が動かないかもしれないくて…。そして、息子はここで手術…すべてが一度に起きて、どうしたらいいのか…」途中で何度も言葉を詰まらせながら語るその姿に、私は胸が締めつけられた。

私は看護師である前に、一人の人間として、この母親の悲しみに寄り添いたいと思った。「今、スタッフがしっかりお子さんを診ています。どうか、私たちに任せてくださいね。少しでも水分をとってください」と声をかけると、母親は涙を浮かべながら、何度も頭を下げた。「息子を、どうか…お願いします」と。その想いを胸に、私は急いで手術室へ戻った。緊迫した現場の空気の中で、私は母親の言葉を伝えた。すると、スタッフたちの表情が変わり、慌ただしく緊張した中にも一体感が生まれたように感じた。まるで、母親の涙が、私たちに一つの「灯火」をともしたようだった。後日、この出来事をスタッフと振り返り、「寄り添う看護とは何か」を改めて考える機会を持った。あの日の母親の揺れる涙に出会ったからこそ、私の中には今も揺るがぬ灯火が灯っている。それは、患者と家族の想いに真摯に向き合い、看護の原点を忘れずにいようとする、決意の灯火だ。

（講評）

患児の緊急手術という緊迫した状況の中で、家族の深い悲しみと混乱に寄り添おうとした看護師の姿勢が印象的な作品です。母親の想いをチームに伝えた場面では、手術室全体に生まれた一体感が静かに描かれ、看護の本質が伝わってきました。目の前の命だけでなく、その向こうにある家族の感情にまで向き合おうとする筆者のまなざしに、看護師として、人としての誠実な姿がにじみ出ています。理性と感情の両面から丁寧に描かれた、胸を打つ一作です。

エッセイ「印象に残った手術看護」(看護師の部)

優秀賞受賞作

その手で、安心へ。

花田 朋子

「手術、やめたいくらい怖くて…。閉鎖された空間が苦手で、エレベーターも無理なんです」。手術前日の術前訪問で初めて出会った彼女は、閉所恐怖症による強い不安を抱えていた。

手術室に異動して間もなかった私は、「ここでの看護には限りがある」と、どこかで割り切っていた。けれど彼女の言葉が心に残り、「この一度きりの関わりの中で、私にできる看護とは何か」と自問した。視力が悪く、メガネをかけていた彼女の姿を見て、ふと考えた。手術室の怖さは“見えること”で増幅されているのではないか。無機質な機器、閉ざされた空間、慌ただしく動く人々……。もし、“あえて見せない”という選択をしたら、不安は和らぐのではないか。「当日、よければメガネを外して手術室に入りませんか？私が手を握って一緒に歩きます。見えなくても、そばにいます。」そう伝えたと、彼女は静かにうなずいてくれた。

手術当日。彼女は自らメガネを外し、私の手をぎゅっと握って一歩を踏み出した。震えていた手は次第に落ち着いていった。

手術は無事に終わり、術後訪問で再会した彼女はこう言ってくれた。「思ったより怖くありませんでした。あなたの手がとても心強かった。もし次があれば、またここで、あなたにお願いしたい」。“またここで”あれほど手術室を怖がっていた彼女がくれたこの言葉は、私の胸に深く届いた。

環境を変えることだけが看護ではない。本当に必要だったのは、「怖くない空間」より「安心できる関係」だったのかもしれない。あれから四年。彼女の言葉は、今も私の中で静かに、確かに根を張り続けている。

(講評)

閉所恐怖症という強い不安を抱えた患者に対し、「見せない」ことを看護の工夫として選択した姿勢が印象的な作品です。手術室へ向かう際、手をぎゅっと握った彼女の強い恐怖と、それでも一歩を踏み出した勇気に胸を打たれました。やがてその手の力が和らいでいく中で生まれた安心と信頼は、環境を超えた「関係性」の力を物語っています。限られた関わりの中でも、患者にとって忘れられない看護が成立し、看護師自身の原点にもなり得ることを丁寧に示した一作です。

エッセイ「印象に残った手術看護」（看護師の部）

優秀賞受賞作

「終活も全部終わらせてきました」から感じた重さ

岡村 沙織

ロボット支援下での前立腺全摘出術のため手術を受ける患者は、術前説明の時から不思議なくらい落ち着いていると感じた。

当日も緊張の様子はなく穏やかに「終活も全部済ませてきたんだよ」と教えてくれた。私は、手術を受ける患者は「万が一」を想定してそれだけの覚悟で来るのだと少しハッとした。手術は予定通り終了し、後日術後訪問へ伺った。

手術当日の患者の言葉が私の印象に残り、手術を受ける患者の覚悟を感じたことを本人に伝えてみた。「そんな重い覚悟で言ったつもりはないんだよ。あの日は自分でも不思議なくらい怖さもなければ緊張もしなかった。それは皆さんを信頼してお任せするしか無いと思っていたから。本当は麻酔で眠る前に、手術に関わってくれる全員と顔を合わせて宜しくね、と言いたかったぐらい。医療を信頼していないわけではないけど手術に絶対は無いよね。0.01%の万が一がある。だから手術が決まった6か月前から色々なことをしてきた。家の片づけ、家族旅行、お金のこと、古い友人や昔の彼女にも会ってきたよ」と話してくださった。患者自身の準備で周囲が不安や悲しみを抱かなかったかと尋ねてみたが、「仲間は大げさだと笑ったけど元気に会えたらそれは楽しみになるからいいよね、家族は僕と同じ気持ちだから何も言わなかったよ」と穏やかな笑顔で教えてくれた。

手術室看護師にとって、日々の何件もある手術の中の一つとして捉えてしまいがちだが、今回の出会いで手術を受ける患者の思いや覚悟を改めて考える機会を頂けた。これから出会う一人ずつの思いに寄り添いながら、責任を持って関わっていきたいと思えた出会いであったことをご本人にお伝えし訪問を終えた。「また退院前に会いに来てても良いですか」と聞くと「いつでも待ってるからおいで」と優しい笑顔で見送ってくれた。

（講評）

穏やかに手術に臨む患者の姿を通して、「覚悟」とは何かを見つめ直す機会となった看護師のまなざしが印象的な作品です。身体的な準備だけでなく、人生全体を見据えて心の整理を行う患者の姿から、手術を迎える人の深い思いが伝わってきます。その言葉にしっかりと耳を傾け、術後も対話を重ねた看護師の姿に、手術看護の本質がにじみ出ています。何気ない会話の中にも信頼関係が築かれていく様子が丁寧に描かれた、静かな余韻の残る一作です。